

なか むら やす ひろ
中 村 安 宏

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文博第28号

学位授与年月日 平成8年3月26日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程)
国文学国語学日本思想史学専攻

学位論文題目 佐藤一斎とその周辺

論文審査委員 (主査)
教授 玉懸 博之 教授 羽下 徳彦
教授 吉田 忠

論文内容の要旨

序章 一斎研究の課題

江戸後期の儒者、佐藤一斎(安永元年-安政6年、1772-1859)は、文化2(1805)年以降は林家塾長、天保12(1841)年以降は幕府儒者として、学者や藩主などから仰がれる位置にあった。学術思想界にあってのひとつの軸的存在であったと言ってもよいであろう。また彼には多くの弟子がいるが、とりわけ幕末期に心性の学を講じた陽明学者や朱子学者に大きな影響を与えている。近代においては、その言葉が心把握の拠り所やあるいは心の修養の糧として尊重された。西郷南洲が『手抄言志録』を作ったことはよく知られているが、そのほか各人の自主独立を唱える植木枝盛は「言志四録」を愛読して、そのなかに人の心の「洪大無辺」な働きを読み取り、人間の本性は「保生避死」にあると捉える田口卯吉の場合には、一斎の言葉がみずからの安心論形成への刺激となっている。また新渡戸稲造もその処世論のなかに、多く「言志四録」から引用している。このように一斎は、近世・近代の日本思想史を見ていくうえで重要な位置を占める思想家でありながら、その思想の核心についてはこれまで明らかにされていない。

一斎没後、その思想をはじめて本格的に取り上げた井上哲次郎は、一斎の学問的立場について、本領は陽明学にあったが林家塾長、幕府儒者という立場上、表向きは朱子学を講ぜざるを得なかったとし、また運命論について、人間の「自由意思」を否定していると述べた。これに対して高瀬次郎は、前者については、程朱・陸王の学をも含んだ包容力のある宋学の立場から寛政異学の禁に

対して批判的であったとし、後者については「必然論と自由論との調和」を求めていると反論した。ここに両氏により、一斎把握の大きな二つの論点が提示されたわけである。

戦後では田中佩刀氏による年譜の作成が注目されるが、学問的立場については、杉浦明平氏が井上の見解を継承し、高橋康昌氏が高瀬の見解を継承している。そのほか前田愛氏は、一斎は政治機構のなかにはめ込まれた個人の心術を説いており、そのような思想から体制変革の論理が導き出されるはずはないことを述べているが、衣笠安喜氏や杉浦明平氏も、その政治的立場をもっぱら保守的・消極的なものと捉えている。これに対して三宅正彦氏や山縣明人氏は、彼の思想には保守的論理だけではなく、変革への論理も見られることを指摘する。ここに一斎把握の論点としてもう一点、その政治的立場が問題になってきたわけである。

私は以上の論点のうち、まず学問的立場については、「陽朱陰王」と誹謗された要素が一斎自身の内にあることは認めつつも、彼を外からの評価に過ぎないこの虚像から解き放ち、彼自身の言葉に即して、内側からその実像を把握することが大切であると考え。基本的には高瀬の理解によりながら、思想の形成過程を明らかにしつつ、彼の立場の意味するところを考えていく。また運命論に関しても、高瀬の「必然論と自由論との調和」という理解を踏まえながら、そのことがどのような意味を持っているのかを明らかにしていきたい。政治的立場に関する三宅氏や山縣氏の見解は注目される。私も一斎の思想には、学問的立場だけではなく、二面性があると見ている。しかし両氏のように体制の保守か変革かという枠にはじめからとらわれることなく広い立場から、一斎自身の言葉に即して二面性の内容を捉えていくつもりである。

さて従来の研究で欠けている点はずぎのとおりである。第一に、一斎の青年期の思想が明らかになってはいない。私は、一斎の青年期に確立された思想が、彼の生涯の思想的営為の核心部になっており、彼自身の思索の深まりや社会的立場の変化、さらには彼を取り巻く学術思想界の状況などにより、思想の姿には変化が生じ、あるいは新たな要素が加えられていくと考えている。ということはこの時期の思想を明らかにしないと、彼の思想の核心は明確にはならないことになる。第二に、これまで大塩中斎と対照して一斎の思想が論じられ、また一斎の正学派朱子学への対抗姿勢が指摘されることはあったが、一斎と彼を取り巻く思想家たちとの関係を明らかにし、たがいの思想を比較するという作業が、十分に行われているとはいいがたい。そのため一斎の思想の特徴も十分には明らかになっていない。そこで一斎を取り巻くとくに重要な思想（家たち）として、林錦峰、林述斎、正学派朱子学、大塩中斎、後期水戸学、幕府儒者では古賀侗庵を取り上げ、一斎との比較考察をしたい。本論文に「佐藤一斎とその周辺」という題目を付けたゆえんである。

第一章 初期の思想——文化2年林家塾長就任まで

青年一斎の学問経歴はこれまで明らかにはなっていなかったが、朱子学を信奉していた一斎は、寛政3年には徂徠学を批判し、同年の2月から翌4年の6月の間において、朱子学から陸王学へと関心を移していったことが確認できた。また寛政2年に、これからは天下全体を視野に入れていこうと悔悟していることも確認できた。その過程で彼は、徂徠学では道の実践が為政者のみに限定されていると批判し（『護園闢蕪』）、また朱子学の、士大夫官僚による蒙昧な衆人教化という治人論の構図を批判し、人間誰でもが実践可能であるという点から陽明の工夫をよしとして（『大学一家私言』寛政7年以降）、身分階層の区別、学派教派の区別、国際上の華夷の区別を超えたところの

普遍的な道を捉え、人間一般を同等に、天下を狙い得る道徳的主体者として見る立場を確立していった。これが生涯にわたる彼の思想的営為の核心部になったと見てよい。

初期にあってこのような思想が確立された背景として、寛政2年に発令された異学の禁、およびそれにかかわる正学派朱子学の思想が挙げられる。すでに陸王学に引かれていた一斎は、寛政5年からこの禁令の発令先である林家の門人になっていたわけである。異学の禁を主導した正学派朱子学者のうち古賀精里は、政治力による上からの教化という面を正当化しており、陸王学を盛んに批判した尾藤二洲の思想のうちには、己の心への不信、軽視という要素が含まれていた。巷には禁令に迎合する偽朱子学者たちが増えていた。これに対抗して一斎は、道のイニシアチブを為政者から人間一般へと解放して各自の自発性を尊重し、また学派を相対化する公平なる心という視座を確立させていったのである。そして学問は政治に迎合するのではなく、自己の心を抛り所とすべき点を主張した。

正学派朱子学に対しては、一斎の師に当たる大学頭林錦峰や林述斎も批判的であった。彼らは人材育成、現実社会に具体的に対応できる広範な学問という立場に立って、闇齋流の講釈第一主義を批判した。錦峰はまた読むべき書物を限る朱子一尊主義を批判し、述斎は一面、正学派朱子学者と同調して学問吟味を朱子学に統一しつつも、多様な見解や自主的な研究を認めていた。さらに述斎は、朱子が否定したはずの英雄豪傑の権謀も時宜に即するかぎりにおいて認め、朱子学において第一義的ではなかった時や勢を知る重要性を前面に打ち出してもいた。一斎は彼らのアンチ闇齋学派の姿勢を継承しながらも、また彼なりの仕方而异学の禁・正学派朱子学に対抗していたのである。

第二章 中期の思想——林家塾長期（文化2年～天保12年）

一斎の著とされている「言志四録」のうち、当該期に書かれているのは『言志録』と『言志後録』である。「言志四録」とは短い条文からなる随筆集・箴言集であり、このような性格から、その分析・考察には困難さがともなう。私は、初期の思想との関係に留意し、また稿本分析を行うことによって「言志四録」の思想を読み解いていこうと考える。まず『言志録』（文化10年起筆、文政7年刊）については、第一に、初期思想のうちの己の尊重という点が強調されており、天下にかかわっていく己の欲や志や工夫の在り方が注目され、学派の相対化に関しても、門戸を争うことや標榜することが、自己の心の在り方の問題に還元されて否定されていること。第二に、初期思想と同様に国際上の道の普遍性が説かれていたが、当時一斎は文字にとらわれることを批判して心を尊重し、さらに心の抛り所として天を重要視しており、そのため道に関しても、文字の違いを超えたところの普遍性が説かれ、また、その普遍性を支えるものとして、厚薄愛憎のない天が位置づけられていること。『言志後録』（文政11年～天保8年ころ執筆、弘化3年刊）では学の在り方が問題にされており、自己の自得だけでなく他の学ぶ者の自得が尊重されていることを明らかにした。以上は、初期思想の展開と見てよいであろう。

一斎の思想の核心部は、時代情勢の壁の前で屈折もしている。古賀精里の晩年に当たる文化年刊後半ごろ、そして天保8年の大塩の乱以降、陽明学への排撃が強まっていることが確認できる。そんななかで一斎は、『大学欄外書』『伝習録欄外書』『近思録欄外書』などの注釈書において、陸王学の諸説は宋学（周濂溪と程明道・程伊川などの学）に淵源していることを説き、また『言志後録』では学の構成づけを行って、朱陸王などの諸学説間には異同があるが、宋学の傘下にある点では同

じであると言う。この朱陸王（など）同宗論は、それまでの学派を相対化する公平の視座に加えるに、外への配慮をもってして形成されたものであり、一面では林家（宋学）塾長という自己（王学）の立場を正当化するものであるとともに、また彼が陽明学の正当な理解の深化を求めていることを考慮すると、陽明学を弁護してその定着を図るものでもある。

一斎と後期水戸学とを比較してみると、道をめぐっては、日本固有と捉える藤田東湖、万国にわたると捉える一斎と会沢正志斎、そして日本と中国にわたると捉える徳川斉昭というように齟齬の様相は複雑なのであるが、一斎にあって道を実践する拠り所が自己の性にあるのに対して、後期水戸学では共通して、それは天照大神以下の神格や人格への「報」の意識にあり、そのため民の意識を天照大神らに向かわせる必要があるという点で、両者は相対している。また一斎の国際上の道の普遍性の思想は、華（＝中国）夷（＝日本やさらには西洋諸国）意識を乗り越え、それを形骸化しようとするところに成り立っていたのであるが、そこにおいて皇祖とは、中国だけではなく、日本にも道が存することを証する指標であった。彼における皇祖は国家統合の問題と結びつくものではなく、その点で後期水戸学とは異なっている。なお一斎に見られる中国に対する対抗意識は、林述斎や池田定常など、彼の周辺において共通意識として受け入れられていたものでもあった。

第三章 晩期の思想——幕府儒者期（天保12年以降）

『言志四録』のうち、当該期に書かれているのは『言志晩録』と『言志叢録』である。『言志晩録』（天保9年起筆、ただし多くは儒者就任後に書かれている。嘉永3年刊）では、幕府儒者となった一斎が、既成の学問をそれぞれ位置づけ評価することによって、自己の学問的立場を鮮明にしていた。すなわち彼は、朱陸同宗を説き、王陽明も朱陸を兼取したことを述べるとともに、日本では藤原惺窩が朱陸を兼取し、林羅山も一家に拘泥しなかったのに対し、闇齋学は朱子学への拘泥がはなはだしいものとし、自己の学問は惺窩や羅山につながるものであることを明らかにする。これは朱子学陣営からの陸王学攻撃を念頭に置いたものである。さらに彼は既成の工夫を他者に押しつけることの不可を説き、自分は「不立名目」という立場であることを宣言している。そのほか雑博な学とりわけ考証学を批判し、また石門心学と陽明学とを同一視して批判する古賀侗庵のような見方に対し、彼は石門心学は陽明学の左派と同系であるとして、これを切り離して陽明学を弁護しようとしていた。

『言志叢録』の一斎は、同じく朱子学を基本とする場にありながら、それを雑博な知識収集の学問へと変形させていた侗庵のような立場が主流としてあったのに対して、陸王学と折衷しながら自己の心の修養の学問を求めていた。また海防論について、軍艦を導入しようとする侗庵の主張が幕府儒者内でも主流となっていくが、彼は地域風俗の「才」の相違にもとづき西洋の模倣には批判的であった。このように見てくると、幕府儒者期の一斎の思想は、侗庵的思想の対極に位置していたものとまとめることができる。

ところで、文字上の学を批判して心学の立場に立っていた一斎は、『言志録』のなかで西洋について、「横文之俗、亦能性其性、無所不足、倫其倫、無所不具」のであると説いていたが、『言志叢録』では「没字老農、亦或有自得処」と述べている。「横文之俗」と「没字」（字を知らない）の語に注意したい。一斎は道は普遍的であるという立場にもとづき、使用している文字が異なる西洋や、文字が読めない文盲層までを見渡し、雑博な学や考証学などの文字上の学を持つ差別性を問題にし

て、それを超えるものとして心学を説いていたのである。

第四章 一斎思想の諸特徴

一斎の思想を人間観という面から捉え直そうとすると、相良亨氏の研究を踏まえねばなるまい。氏によれば一斎は、(a)自己を頼む独立自信の精神を説いており、また(b)軀殻仮己に対する、靈光真我=天、の主宰性の確立を求め、天の无妄性に生きること、天行の在り方に従って事を処することを説くとともに、(c)天はまた数(運命)をつかさどるものであり、不可測なものでもあると説いているという。それぞれの内容自体にはとくに異論はないが、いくつか不十分な点がある。第一に、一斎の自己に関して、(a)のように自己を頼む独立自信の精神と言っただけではその内容を言い尽したことはない。第二に、天についての見解のうち、(b)の天と(c)の天との関係について氏は、「天に帰一するところに道義的営為の根本を理解していたが、天にはまた『天定之数』という仕方で、人間のさだめ、運命を司るものとして捉えられた」「帰一すべきものとしての自明性ととともに不可測の面を天はもっているのである」と述べているだけである。二種の天が総合的に捉えられていないために、一斎の天、および天人関係の根本的な特徴がもうひとつ明らかになっていない。

私は一斎が求めている人間の在り方として、学派の相対化を実現する、主張の念を去ったところの「公平之心」があると考え(これは大塩中斎に求めたものでもある)。これは、それぞれの自己に即して工夫を行う個別的な自己(他者)を認め尊重する心であると言える。また一斎自身を動かしていた思想として天や数の思想が重要であるが、天は内在((b))、外在((c))どちらの場合にせよ己に対峙するものとして捉えられており、それは人間の知力を超越した存在であるが、深慮を持ち、また厳正・公平、さらには靈明なものであり、己が聴従すべきものであった。また外在の天に関して説かれる数(天定之数、気数)は、循環的に運動し、その奥には理があるとされる。一斎は天や数を問題にしなから、人間としては結局はどうしようもない事柄にかかずらうことを戒め、また努力しているかぎりはその成果が期待できることなどを説いており、これを一概に決定論・宿命論と片付けることはできない。このほか天・心性——地・身という彼の二元的人間把握に即して説かれる敬や無善無惡説も含めて、本来の朱子学や陽明学とは異なる一斎独自の思想が形成されていたと言える。

このほかには、一斎の「皇統一姓」は皇祖の場合と同様、中国との対比のなかで使われながらも、日本が古来の書籍文物を維持し、外来のそれらを保存することの指標とされるなど、日本の中国からの独自性を示す指標となっていること、一斎は身分階層を超えたところの核心的思想を説きながらも、また藩主や家老などの要請に応じて、身分階層に即した心術も説いていること(二面性)を明らかにした。

第五章 継承と離脱——門人の思想

一斎には数多くの門人たちがいるが、そのうち一斎の思想に深く接した思想家として、のちに師の思想から離脱することになる大橋訥庵と、一斎が学問上の後継者と目した河田迪斎(林家塾長→幕府儒者)とを取り上げた。そして師の思想がどのように継承され、あるいは否定されていったのかを見つづ、一斎思想の意義を考えた。

大橋訥庵は、もともと心性の学を講究しており、学問的立場も師と同様、程朱・陸王兼学であっ

た。その彼が嘉永6年のペリー来航のころより攘夷行動に走るようになり、また学問的にも劉念台信奉を経て、程朱学一尊・陸王学排斥へと変わっていく。そしてそれにともない師を批判することになる。一斎思想から離脱していく訥庵を突き動かしていた信念（思想）とは何であったのか。訥庵の華夷思想にあって華とは、第一に、聖人（天皇）が出現して教えを施す、第二に、教えを受け入れる地盤がある、という条件のもと、教化が広まった範囲によって聖人（天皇）が定めた地域を指す。そして日本（人）と中国（人）とは陽気を受けているため、教えを受け入れる地盤という点で優れており、もともと華となり得る条件が備わっていたと言う。しかし洋学者の増加などで陰気が増している現状では、人々が、聖人（天皇）が整備したところの道を明らかにしていかないと、華も失われていくと唱えた（なお洋学に対抗し得る学として朱子学が持ち出された）。このようにもともと華が実現されていた日本を思った訥庵は、現状の、すでに華が失われている中国（清＝夷狄）と、失われかけている日本を見るにつけて危機意識をつのらせた。この危機意識にもとづく「国家本位の思想」（尾藤正英氏の語）が、師一斎の人間尊重の思想を捨てて転向させることになる。彼の思想は、一斎の思想と比較してみると、日本＝華であるべく条件を整備した天皇がクローズアップされており、道を実践することが華を実現することにつながっているという点で、大きな相違があると言えよう。しかしまたその尊王攘夷の思想は、後期水戸学のものとも異なっている。会沢正志斎は「後世は学問も土庶に降りて」（『退食問話』）いる点を批判していたが、これともかかわって後期水戸学の攘夷論が、民心統合のための上からの「政治的な術策」（尾藤氏の語）という意味合いを持っていたのに対し、訥庵の場合、攘夷のイニシアチブは人々一般の側にあった。これは、彼の思想が一斎を経過したものであったことからくる特徴である。

河田迪斎は、ペリーとの外交交渉に当たった大学頭林復斎に対する、訥庵らの批判に対抗して、林家擁護の論を展開していた。彼は林家周辺にあって西洋学を嫌忌する姿勢を取っていた。しかし当時であっての問題は、むしろ西洋諸国といかに対応していくかという点にある。迪斎は打払い一辺倒の論を打ち砕こうとしたのである。その彼の基盤となっていたのは、ひとつには古賀侗庵が積極的に唱えて学問所内に浸透し、ほかの幕府儒者も共有していた変通の理の思想であり、ひとつには一斎から継承した世界普遍の道の思想であった。要するに迪斎は攘夷論に対抗した儒者であり、そこに一斎の思想も生かされていたわけである。

終章 結語

従来の研究において、一斎の思想の核心は明らかにされてはこなかった。彼は天保4年の62歳の折に、たわむれに、「物事は己が心の照り一つ、もろ人の教へ、もろ人の道」（『漫記』『愛日楼全集』巻41）という短歌を作っている。「もろ人」と歌ったところに、初期から一貫している彼の思想の核心を見て取ることができる。大路のように平らで広い道を表す、彼の「坦」という名、「大道」という字にも、もっと留意すべきであった。

さてこの核心部は、一斎が置かれていた時代情勢の壁の前で屈折することもあったが（朱陸王同宗論、二面性）、また、当時の学術思想界に対してさまざまな形を取りながら対抗している。初期から中期にかけてとくに彼が問題にしていたのは、寛政異学の禁およびそれにかかわる正学派朱子学であり、中期から晩期にかけては雑博な学とりわけ考証学であった。両者を問題にした時期は截然と前後に分かれるわけではないが、古賀精里が文化末（14）年に没している、ほぼこのあたりが

重点が移る境と見てよいであろう。一斎は、正学派朱子学から雑博な朱子学へという幕府教学の主流に対しては、儒者就任前後にわたって、対抗する立場にあったことがわかるが、それとともに、一斎の思想の核心部は、単なる理念的な主張ではなく、現実の学術思想界を改変していこうとするものであったことを確認することができる。

ところで岡田武彦氏は幕末期において、行動派の儒者とは一線を画し、訓詁聞見、考索知解、議論弁斥、多聞博識、門戸の見を排斥した心性の学を講じ、深い体認自得を旨とした陽明学者や朱子学者（林良斎、池田草庵、吉村秋陽、東沢瀉、春日潜庵、楠本端山、楠本碩水など）を取り上げ、彼らに影響を与えた人として一斎を位置づけている。私は、彼らの心性の学の質がさらに問われねばならないと考えている。本論文では、一斎にあって、その心学は、政治への迎合に対抗するものとしての性格を持ち、さらには文字が読めるか読めないかという違い、あるいは使用している文字自体の違いという、文字によるところの区別を超えていく普遍的な性格を持っていたことを明らかにした。

一斎の思想の核心部は門下生にも継承されていた。このうち大橋訥庵はとくに一斎の、道徳的主体性を庶民にまで拡大した面を受け継ぎ、志士に対し攘夷への決起を促した。これに対して河田迪斎は、とくに万国に普遍的な道の面を受け継いで、攘夷論を批判した。一斎の思想は門下生によって分裂させられつつ、幕末動乱期の政治の場で生かされていった。

論文審査結果の要旨

本論文は、序章から終章まで六章からなる。

序章「一斎研究の課題」で論者は、「一 一斎研究の意味」に始まって、「二 先行研究」で一斎の人と思想に関する従来の諸研究を総括する。「三 本論文の課題と構成」で論者は、一斎の思想的営為を、林家塾長に就任するまでの初期、林家塾長であった中期、幕府儒者であった晩期の三期に分ける、思想の形成過程に即して内側から一斎の思想を把握する、初期思想が中期・後期に継承される面を重視する、一斎周辺の重要な儒者たちの思想と対比しつつ一斎の思想を把握する——このように課題・方法を提示し、かつ本論文の章立てを説明する。

第一章「初期の思想——文化2年林家塾長就任まで」は、一斎34歳までを扱う。「一 基礎的考察」で、この期の一斎の事跡と著述活動について、史料を博搜して少なからぬ新事実を示す。「二 初期の思想」では、一斎が14、5歳頃より朱子学を宗としつつも、他の儒学諸派を一概に排斥しない、開かれた思考・態度をみせていた、寛政3年2月から翌年にかけて陸王学を主とした学問・思想へと移行した、朱子学以前に徂徠学を信奉したとする有力説は誤りである、と論ずる。さらに初期一斎は、道徳的主体を階層の別をこえて広く人間一般に見出す見地、地域・身分・学派の別をこえた道の普遍性への確信、朱子学・陸王学などの学派の別を相対視する観点、などをもって、と指摘する。

「三 一斎と林家」では、「二」で明らかにした一斎の学問観・思想が、当時の大学頭林錦峰やその後継者林述斎の学問観・思想と共通する面を広くもつとともに、寛政異学の禁を主導したいわゆる正学派朱子学者たちの学問観・思想とは異質であった、と説く。

論者の本章での記述は、一斎の初期思想の研究を著しく前進させたもので、注目に値する。

第二章「中期の思想——林家塾長期」は、文化2年（34歳）から天保12年（70歳）までを扱う。「一 基礎的考察」でこの期の一斎の事跡と著述について新事実を示す。「二 『言志四録』の思想（一）」では、一斎の主著「言志四録」のうちこの期述作の『言志録』と『言志後録』をとりあげ、両書それぞれにおいて諸稿本から刊本へと内容が変化してゆくさまを仔細に調査した上で、両書の思想を把える。初期一斎にみられた、道の普遍性の確信、道徳的主体拡大の志向、学派の別に拘泥しない開かれた態度・思考などが、中期一斎において「心」や「天」の観念に支えられて新たな思想的展開をみせる、と説く。論者が、諸稿本と刊本とを綿密に対比しつつ『言志録』『言志後録』の形成過程を究明し、これを踏まえて両書の思想を把えたことは研究史上高く評価される。

「三 一斎と大塩中斎」では、大塩の乱（天保8年）を起した中斎の思想と一斎の思想の違いを指摘し、「四 朱陸王同宗論の形成」では、一斎はこの期になると、朱子学と陸王学とが濂洛（周濂溪と程明道・程伊川）の学問に淵源している点では同一だとする朱陸王同宗論を形成しつつ陽明学の正当化とその普及をはかっていた、と論ずる。「五 一斎と後期水戸学」では、一斎の思想が同時期の有力思想である後期水戸学と根本的差異をもっていた事実を、「弘道館記」の成立事情を精査することによって究明する。

第三章「晩期の思想——幕府儒者期」は、天保12年（77歳）から没年の安政6年（88歳）までを扱う。「一 基礎的考察」で一斎のこの期の事跡と著述についての新事実を示したのち、「二 『言志四録』の思想（二）」では、『言志晩録』と『言志叢録』について、それぞれに諸稿本から刊本へと内容が変化してゆくさまを精査した上で、両書の思想を把える。一斎は中期以来の朱陸王同宗論をより拡充しつつ、この期に既成の諸学派の位置づけや自己の学問的立場の定立をなした、初期・中期以来の、道の普遍性への確信、心の重視、道徳的主体の拡大の志向などよりなる一斎学は、文字が異なる西洋や文字の読めない文盲層までも見渡した広がりをもつにいたった、幕末の外圧に対しても一斎らしい対応がみられた、とする。

第四章「一斎思想の諸考察」では、第一章から第三章までの考察を踏まえて、一斎思想の全体的把握をめざす。

第五章『継承と離脱——門人の思想』では、河田迪斎と大橋訥庵をとりあげて、一斎の思想・学問が門人たちにより継承または変容されるさまを把える。

終章「結語」では、それまでの記述を簡潔にまとめている。

総じて本論文は、江戸後期の大儒佐藤一斎の思想を、新しい時期区分観に立ち、従来の研究では未使用の多くの史料を用い、周辺の重要な儒者の思想と対比しつつ、把えようとしたものであり、一斎の人と思想についての重要な新事実・新知見を提示し、一斎研究さらには近世思想史研究の進展に大きく寄与している。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。